

中国の大学における日本人教師の 実態に関する研究 — 日中技能者センターから派遣される 日本人日本語教師を対象に —

曹 美蘭

(本調査研究は平成 20 年度文教協会研究助成課題で、今度発表の内容は前半の内容である)

1. はじめに

日系企業の中国進出ラッシュが続くに従って、中国人の日本語学習者も急増し、中国の日本語教育も急速な発展を見せている。そして、中国の大学で日本語を教えている日本人教師の人数も飛躍的に増えている。筆者が勤務している佳木斯大学にも 1994 年から毎年 3 人の日本人教師が赴任しており、筆者自身も長年、日本人教師の受け入れに関わってきた。しばしば日中双方の要望のギャップを感じてきた。受け入れ側の者として、これら日本人教師の全員が正式な職業訓練、十分な心構えを持って中国へ赴任し、また、中国大学側の期待通りの役割を果たしているかどうか疑問に感じてきた。具体的に言えば、彼らの授業に対する中国人学生からの不満、中国大学側の教師・事務員との交流上の摩擦等が挙げられ、そのため、日本語教育・対人コミュニケーション・異国での仕事・生活において、大きな障害が生じているように感じた。以上の問題意識に基づき、本研究では中国に赴任する日本人教師の中で、主に日本国内の日本人教師派遣機関である「日中技能者センター」から派遣された日本人教師を調査対象とし、中国での日本人教師の実態について調査研究を行った。

2. 日本人教師への調査結果と考察

2.1 日本人教師への調査について

2.1.1 調査内容と目的

本調査では中国の大学に派遣される日本人教師はどのような意識で中国に赴任しているのか、また、これらの日本人教師と中国大学側との間にどんな問題、トラブルが起きているのかが主な内容である。そのトラブルの原因は何か、中日相互の各個人によ

るものか、それとも組織、文化の差異によるものか等を明らかにし、その問題の改善策を探るのが本研究の目的である。

2.1.2 調査対象

本調査は、主に中国黒龍江省の大学において日本語教育経験のある日本人教師を対象とした。彼らは日本で学校教師をして、定年退職後に中国での日本語教師を選んだ人が多数である。

2.1.3 調査期間・方法及び分析方法

本研究では、中国で日本語教育経験のある日本人教師に対して、現地中国の日本語教育の現場で感じたことをアンケート形式で回答してもらい、一部の人には面接調査を行った。面接調査はアンケート調査では不十分だった点を確認する内容を盛り込んだ。アンケート調査は 2008 年 11 月～12 月の約二ヶ月間、面接調査は 2009 年 1 月～2 月の約二ヶ月間に渡って実施した。面接調査は予め細かい質問を設定しない半構造化深層面接調査を実施した(高橋、渡辺、大淵 1998)。そして、アンケート調査で得られた結果をグラフ化し、そこから読み取れることについて考察を行なった。

2.2 日本人教師への調査結果と考察

2.2.1 研修センターに関しての調査結果

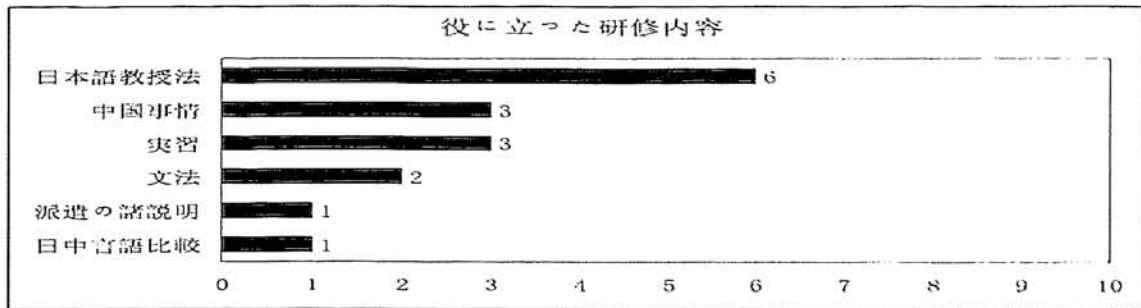
① 日本での日本語教師としての研修経験の有無

調査対象の日本人教師 15 人中、10 人が研修を 2 週間以上の経験者で、5 人が研修無経験である。

② 研修経験者に対する調査結果 (10 人)

質問「研修は役に立ったか」という質問について、日本で研修経験のある 10 人中、3 人が「とても役立った」、6 人が「役立った」と答え、合わせて 9 割が研修にプラス評価をしている。

③[グラフ 1]役に立った研修内容 (単位: 人)



上の[グラフ 1]は「役に立った研修内容は何か」という質問を、10 人の対象者に対して行った結果である。なお、本調査では複数回答を可能としている。日本で研修経験者の 10 人の中で 6 人が「日本語教授法」と答え、3 人が「中国事情」と「日本語教育実習」と答え、「文法」と答えた人が 2 人で、

「派遣の諸説明」と「日中言語比較」は各 1 人である。これは研修期間が 2 週間とは言え、「日本語教授法」の研修などは現地の中国の日本語教育現場で、かなり役に立ったことを示している。(日中技能者センターでの研修は 2 週間で、実際の研修は 10 日間)

④[グラフ 2] 研修機関でさらに力を入れてほしい研修 (単位: 人)



上の[グラフ 2]は上の[グラフ 2]は「研修機関でさらに力を入れてほしい研修」という質問への回答の結果である。結果は日本での研修経験者の調査対象 10 人の中で「中国事情」という答えが 5 人で、一番多い割合を示し、次に「中国大学での教育内容」が 4 人、「日本語の教育方法」が 3 人、「事前の心構え」が 2 人である。調査対象の半分の 5 人の「中国事情」という答えと、4 人の「中国大学での教育内容」という答えからは、2 週間の研修のうち短時間の「中国事情」の紹介、「中国大学での教育内容」の紹介などでは不十分であること、これらが原因で日本人教師が中国教育現場で各種の問題に直面していたことが考えられる。

2.2.2 研修センターに関する総合考察

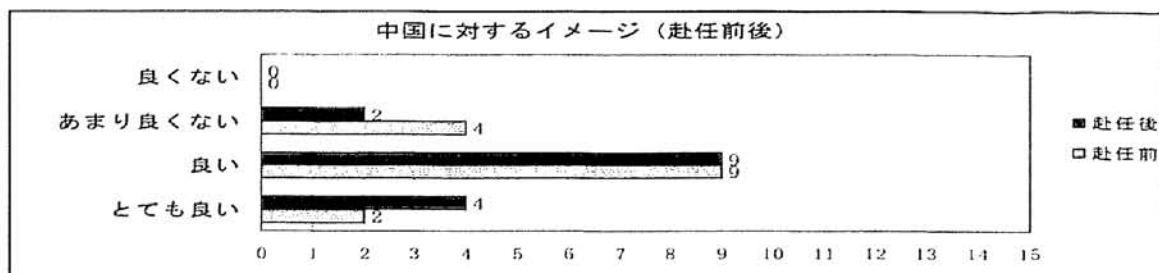
①, ②, ③ [グラフ 1]、④[グラフ 2]、は日本人教師の中国赴任前の研修状況についての概観である。

①[グラフ 3]中国に対するイメージ (赴任の前と後)

調査対象 15 人の内、10 人が研修経験者であるが、そのうち 9 人が日中技能者センターから 2 週間の研修を受けていて、1 人が他の研修機関での 1 年間の研修であることから、研修内容の評価については主に日中技能者センターからの 2 週間の研修プログラムについて考察を行った。2 週間の研修内容のプラスの評価を順番は 1) 「日本語教授法」、2) 「中国事情」、3) 「日本語教育方法」、「文法」であるといえる。研修センターとしてもっと力を入れてほしい研修内容の順番は 1) 「中国事情」2) 「中国大学での教育内容」3) 「日本語の教育方法」、「事前の心構え」と言える。

すなわち、2 週間の研修はそれなりの効果はあるものの、研修期間の検討、研修内容、プログラムの再検討の必要性が見られる。

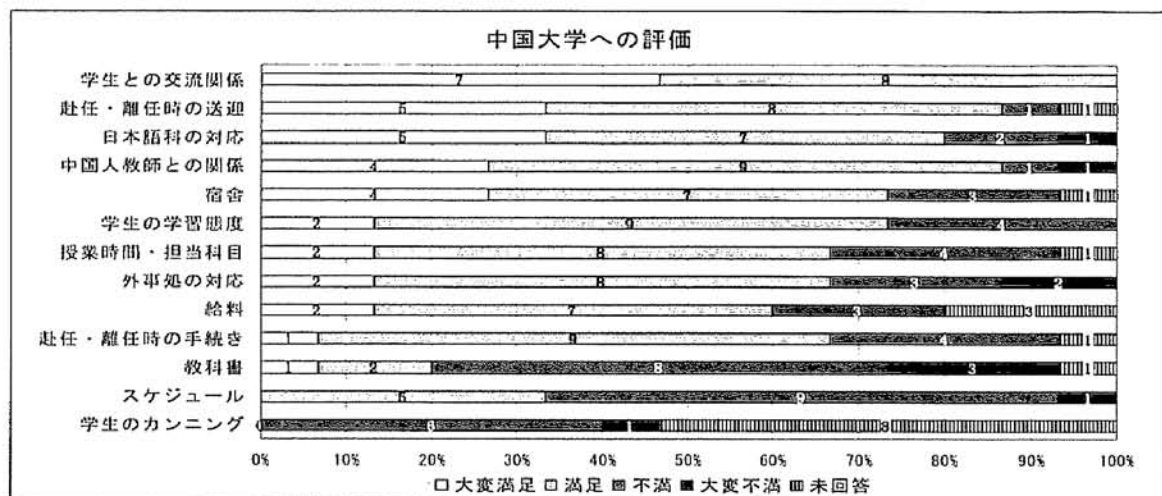
2.2.3 中国大学側に関する調査結果



上の[グラフ 3]は「中国に対するイメージ」についての質問を日本人教師 15 人全員に行った結果である。赴任前と赴任後のイメージに分けて比較した結果、調査対象 15 人の中で、赴任前「良い」が 9 人、赴任後「良い」も 9 人で、数字的に同じである。

また、赴任前「とても良い」が 2 人、赴任後「とても良い」が 4 人で、「とても良い」との印象を持つ人が 2 人増えている。ここからは中国に赴任する日本人教師の大多数が中国、及び中国人に親近感、友好的感情を持っていることが読み取れる。

②[グラフ 4]中国の大学への評価



上の[グラフ 4]は「中国の大学への評価」を調査対象 15 人全員に行った結果を示している。この評価を 13 項目に分けて質問を行い、「大変満足」、「満足」、「不満」、「大変不満」、「未回答」で回答してもらった

せて 8 割が「満足」というプラス評価である。

その結果、「グラフ 4」の内容を上から順番に述べると「学生との交流関係」という質問には、7 人が「大変満足」で、「満足」の 8 人を合わせて 100%の日本人教師が満足していることを示している。

「中国人教師との関係」という質問には、4 人が「大変満足」、9 人が「満足」、「不満」が 1 人で、「未回答」が 1 人である。「大変満足」と「満足」を合わせて 13 人で、この項目でも 8 割以上の日本人教師が「満足」評価であることがわかる。

「赴任・離任時の送迎」という質問には、5 人が「大変満足」、8 人が「満足」、1 人が「不満」で、未回答が 1 人で、8 割以上の日本人教師が「赴任、離任時」のサービスに満足評価をしている。

「赴任先での宿舎」という質問には、4 人が「大変満足」、7 人が「満足」で、「大変満足」と「満足」を合わせて 11 人、7 割以上が赴任先での宿舎には満足の評価であることを示している。「不満」が 3 人、「未回答」が 1 人であるが、ここからは、中国は日本に比べ宿舎のお風呂の不便さ、設備の不便さなどの若干の問題点が窺えるのではないかと。

「日本語科の対応」という質問には、5 人が「大変満足」、7 人が「満足」、2 人が「不満」で、「未回答」が 1 人である。「大変満足」と「満足」を合

「学生の学習態度」という質問には、2 人が「大変満足」、9 人が「満足」である。「大変満足」と「満足」を合わせて 11 人が「満足」評価で、4 人が「不満」の答えからは、現在の中国の大学生は勉

強意欲、勉強態度には少なからず問題があるということである。

「授業時間、担当科目」という質問には、2人が「大変満足」、8人が「満足」、4人が「不満」で、「未回答」が1人である。「大変満足」と「満足」を合わせて10人が満足の回答である。

「外事処の対応」という質問には、2人が「大変満足」、8人が「満足」、3人が「不満」で、2人が「大変不満」である。「不満」と「大変不満」が3分の1のマイナス評価の背景には赴任先の各大学の差異と大学によっては外事処に日本語ができない事務員だけで、言葉が通じずコミュニケーションがうまくいかないケースが考えられる。

「給与」という質問には、2人が「大変満足」、7人が「満足」、合わせて9人が「満足」評価で、これは調査対象者の年齢層に関係していると思われる。すなわち、日本で定年退職し年金を受給している日本人教師はほとんど満足しているようだが、経済的に保障がされていない若・中年者には、中国現地で生活が出来るぐらいの給料では満足できない現実の問題が指摘できる。

「赴任離任時の手続き」という質問には、1人が「大変満足」、9人が「満足」、4人が「不満」で、1人が「未回答」である。3分の1に近い「不満」の評価は、管理組織の異なる日本と中国の差異、また同じ中国の中でも各大学間のサービスの差異による問題点が窺える。

「赴任先で使った教科書」という質問には、1人が「大変満足」、2人が「満足」で、「不満」が8人、「大変不満」が3人「未回答」が1人で、3分の2の「不満」の評価からは、中国の日本語科で使用している教科書が内容的に非常に古くて、時代遅れが原因と考えられる。

「スケジュール」という質問には、5人が「満足」、9人が「不満」で、1人が「未回答」であり、3分の2に近い「不満」の評価は、中日社会文化的差異による問題と考えられ、中国の大学では年間スケジュールは決まっていますが、その時々によって変わるケースが多いことが原因と考えられる。

「学生のカンニング」という質問には、6人が

「不満」、1人が「大変不満」で、「未回答」が8人である。これは未回答者を除く回答者の全員が「不満」の評価で、これは中国の試験における不正行為氾濫、大学生の道德教育の欠落などの大きな問題点が指摘できる。

ここで一つ補充解釈を行うが、[グラフ 4]中の「学生の学習態度」についてのプラス評価と「学生のカンニング」についてのマイナス評価は一見矛盾している評価のように見えるが、中国の現実そのものに対する評価だと考えられる。日本人教師の評価通り、現在の大学生3分の2は勉強能力もあり、意欲もあってまじめに勉強するのが現実と言えるが、だからと言ってまじめな学生がカンニングしないと断言はできない。勉強が出来る学生は高い点数を取って奨学金を得る目的で、勉強が出来ない学生は何とか合格したいという目的でカンニングをしているのが多く、中国の学生の不正行為、カンニング現象は大きな問題になっているのが現実であるといえる。

2.2.4 中国大学側への総合考察

[グラフ 4]は日本人教師が質問 13 項目について「満足」度の高い順で並べた順ともなるが、この中で上の 10 項目はプラス評価と言え、下の 3 項目はマイナス評価と言え。マイナス評価になっている 3 項目とも日本人教師と現地の関係者とのコミュニケーション上の問題ではなく、中日社会、文化的違い、特に管理組織の違いによる問題といえる。

参考文献

- 石井敏・久米昭元等 1997『異文化コミュニケーションハンドブック』有斐閣
- 石田敏子 1997「日本語教育と異文化教育」『異文化間教育』第11号
- 徳井厚子 1995「誤解はどこから生まれるか：留学生と日本人学生のコミュニケーション・ブレイクダウンへの対処を巡って」『信州大学教育学紀要』86
- 西田ひろこ（編著）辻村明 2007『米国中国進出日系企業における異文化間コミュニケーション』風間書房
- 高橋 順・渡辺 文夫・大淵 憲・1998『人間科学研究法ハンドブック』ナカニシヤ出版

そう びらん／中国佳木斯大学
meilan123jp2000@yahoo.co.jp